

メデイアの中の高齢者像（その1）

山 中 正 剛

一 昭和初年の子供と老人

子供のころの記憶をたぐると、街角や家の中でも物語の中でも、お爺さんやお婆さんがいつも自分ら子供たちと一緒ににいた。昭和初年のことである。毎日朝決まった時間になると手押し車を押したお爺さんが、太鼓をたたきながら「わらびもち・しがらき」と呼び売りしながら回っていた。一銭渡すと、わらびもちをとこてん式に押し出してその場で作ってくれ、布巾で湿気を拭って紙製の三角袋にきな粉と海苔の粉を振り分け、子供の手のひらいっぱい位

呉れた。茶色い鳥打帽をかぶって、とても優しそうなお爺さんだった。

母方の祖母は慶応三年生まれの人だった。いつも子供のころの思い出を語って聞かせてくれた。丹波の篠山の生まれで、朝起きると山から真っ赤な太陽が出てきれいだったこと、父親は殿様で槍を持って馬に乗り、毎朝駆けていたと話していた。明治になって兄弟が株や投機に手を出して田畑を失い、そのうえ大水害に見舞われて豚など家畜が水死して破産し、大阪に奉公に出されたという。もうひとつの「おしん」物語だ。お大師さん（弘法大師のこと）の信者で、法事などにはいつもお婆さんたちが十人近くも家に集

まあって、ご詠歌を詠っていた。鈴を鳴らしながら詠う多声の音楽は印象深いもので、子供心に日本の伝統音楽の美しさに惹かれ、今もそれが耳のずっと奥に響いている。盲目の最後の門付け遊芸人小林ハルさんの歌を聞いた時、同時代を生きた祖母たちの声がどこから唱和しているように感じた。

物語の中でも子供と老人は共同体を形作っていた。テレビがないのももちろんのこと、ラジオもまだ搖籃期で鉱石ラジオのNHKだけの大人の世界であった。子供の世界は鈴木三重吉の「赤い鳥」に始まる童謡・童話が花盛りの時代であった。それはまた子供と老人との共生の世界でもあった。「足柄山の金時」や「大江山の酒呑童子」、「竹取物語」や「舌切り雀」など物語の主人公のワキには、いつも蔭になり日向になって主役を支えるお爺さんやお婆さんのやさしい姿があった。金時やかぐや姫といった物語では童子たちは老人に夢と希望を与え、花咲爺いのように老人もまた童子たちに生きる喜びを与えたのだった。「うば捨て」は、塩水に浸した縄を灰にすることで「灰の縄」を作れることを老人嫌いの王に教えて、うば捨ての愚かさとして老人の知恵を子供たちに語り伝える物語であった。森鷗外の

「安寿と厨子王」では、若く美しい母親は人買いにさらわれて後に盲目の乞食老婆となり、姉の安寿は身を投げ、弟の厨子王は立派に育って後に任地で老婆を救う。「安寿可愛いやホーヤレホ、厨子王可愛いやホーヤレホ」と雀を追う老婆とそれに石を投げる悪童を描き、浦島太郎では、玉手箱を開けた若者がたちまち白髪の老人となるなど、人間の転成・異化や男女の種々相が老人と子供の共有世界のなかに描かれていた。桃太郎物語では川に洗濯にいったお婆さんが、上流からドンブリコ、ドンブリコと流れてきた桃を拾って家に持ち帰ってお爺さんと割ったら俄かに若返り、子供が産まれ桃太郎と名づけられる。若者が老人になるだけでなく老人もまた若返るお話である。子供のころ聞いた俗謡に、

へ高砂や 爺さまと婆さまが 松の下露でイチヤツイテ
いたらば

鶴と亀とが ほっとけほっとけ 若いうちや二度ない
もっとやらせろ

というのがあったが、子供の物語世界には老人の性がおおらかに語られていた。私が経験した戦前の生活と文化の中では、老人は子供と共に活き活きと生きていたのである。

當時はアルス日本児童文庫と、それと競うように出された文藝春秋社の小学生全集が、日本の童話だけでなく数多くの世界の童話を紹介して私たち子供に夢を与えた。その世界の童話の中でも子供と老人は常に同居していた。「金の魚」は貧しいが優しいお爺さんと強欲なお婆さんを扱ったものであり、「ナーゼ（鼻）」というのは大きな鼻がった鼻を持つ魔女を主題にしたもので、その挿絵の印象が強くて今も忘れられない。オスカー・ワイルドの「大男」というのがあった（イギリス童話）。あるところに広い庭を持った大きな男が住んでいた。男が留守の間に庭に子供たちが遊びに来るようになった。庭の木々は一斉に花をつけ、鳥がさえずって賑やかな子供の天国となる。やがて大男が帰ってきて子供たちを追いついたところ、花は散り鳥は飛び去って、庭は一年中雪と霜と北風が吹き荒れる冬景色となってしまう。ある日大男が目覚めると、花が咲き乱れ、鳥がさえずっている。驚いて目をこすると、土塀の下的小さい穴から子供たちが大勢庭の中に入り込んでいる。しかし庭の奥の一本の木だけには冬が残っていて、そこに小さな子が立っている。あまり小さいのでその手が木の枝に届かないのだ。大男はわけを知ってこっそりその小さな

子にしのびより抱きあげ木に乗せてやると、その木はみるみる花をつけ鳥も来て啼く。これを見て安心した子供たちは、また以前のように庭に来て遊ぶようになり、花も鳥も舞い戻って庭は一面の美しい楽園となる。ところがある日突然あの小さな子の姿が消えてしまう。大男は子供たちとその行方を聞いて回るが誰も知らない。ある朝大男はあの小さな子が、金色の枝に銀色の実をつけたあの木の下に立っている夢を見る。大男は喜び駆け寄り小さな子を抱き上げる。午後になって子供たちが大勢いつものように遊びに来た時、一本の木の下に老いた大男が眠るように死んでいるのを見つけるといふ、童話の中の死の話であった。

物語だけでなく暮らしの中にも死が普段にあった。私の祖母も家で一週間寝て家族に囲まれて死んでいた。明治生まれの私の父も母もみな、家で家族に看取られて亡くなった。しかし戦後の私たちの暮らしからは、いつか老いと死の影が薄れ消えていった。生と死は表裏だから、死のインパクトが薄れれば生の実感も薄れる。最近の自殺ばやりの背後にはこのような死と生の緊張の希薄化がある。原因はいろいろあろう。家族制度が変わって核家族化が一般化したことも、老いと死の感覚の変化に大きな役割を果たし

た。子供が老人と一緒に暮らすことが少なくなつて、子供にとつて老いはイメージしにくいものとなつた。医療が発達し人は病院で死ぬものとなつて、死は日々の生活から隔離され見え難いものとなつてしまつた。老いや死を、誰もが辿つていく人生コースの一段階として直感する枠組み体験の喪失である。

二 戦後世代の老いの否認

戦後生まれのいわゆる団塊の世代が人口の大きな部分を占め、市場の関心を集め続けたことも大きな理由である。市場の牽引力である若さに価値があるという通念が行きわたつたからである。それまで市場から切り離されていた子供が子供マーケットの主役となり、戦後史と共にヤング市場を形成し、マス時代の寵児、消費文化の英雄となる一方で、市場にとつて保守的な爺婆は視野の外に放逐されたのである。石原慎太郎の『太陽の季節』（一九五五年）や裕次郎の『太陽にほえろ！』が夕陽ではなく太陽を、老人ではなく若者を讃えるなど、物語の中でも戦後老いは消えた。物語の中で「爺」と「婆」が復活するのは有吉佐和子

の『恍惚の人』（一九七二年）の中である。今日では新聞やテレビで鳥の啼かない日はあつても、恍惚にはじまつた「ボケ」と「痴呆」というキーワードが登場しない日はない。

新聞やテレビで高齢者について語っている内容は、病気で無力でボケて失禁する、骨粗鬆症や自分の名前さえもわからなくなるアルツハイマー病とそれを介護する家族の苦悩、病院と社会保障制度への負担、長生きする高齢者の社会保障費が増えても、若い世代が拒否すれば社会保障制度は破綻するといったもので、高齢者を社会病理の対象とみなし、否定したいが否定できない厄介な問題の人として描いている。老いさらばえた恐ろしい高齢者像である。

ゼミの卒業生で一九五〇年生まれ的女性に、この世代の高齢化をどう考えるかと聞いてみた。一九九八年版の『国民生活白書』が「中年」に焦点を合わせ、その不安と希望を描き出そうとしていたからである。中年というのはこの白書では四十代、五十代とし、「戦中生まれ」「団塊の世代」「その後の四十代」の三つに分けている。この元ゼミ生はまさにこの白書がねらいとした世代の人である。私の質問に対して、「シニア」も「夕焼け」も嫌いという答え

が返ってきた。当然であろう。人生八十年の時代である。

中年というのは『広辞苑』によれば四十歳前後の壮年を指すところだが、この白書では四十代、五十代としている。以前初老といわれた五十歳は、今では人生で最も充実した時期である。奈良林祥さんであったと思うが、子育ても終わった五十歳代は女性の旬だという。そうなら「若いうちや二度ない もつとやらせろ」となる。まさにこれからという時にどうして老いこまねばならないか。おまけにこの世代は高齢化した親や舅・姑の世話を強いられている。その上老いのイメージは恐ろしい。できれば対岸の人ごとですませたいに違いない。私自身でさえ六十五歳になって市役所から「老人医療証」が届いた時、「老人」とはなんだバカにするなど、バスの「敬老特別乗車証」つまり一年有効の市内定期券もろとも屑籠へ放り込んでしまったのだから。「私もとうとう高齢者なの？」という同年の女性の新聞投稿記事があったのも記憶している。若さの信奉と老いの否認である。しかし年寄りに囲まれ可愛がられて育った私たちと違って、核家族のなかで育った五十歳前後のこの世代は、一層徹底した老いの否認観をもっているだろう。しかし一方では、近いうちに確実にこの世代にも高齢化の

波が押し寄せる。国民生活白書はこれらのことを知っていて、そこに焦点を合わせたのである。

この世代は戦後を最初に体験した純粹戦後派である。この卒業生と同じ学年の学生たちがヘルメットをかぶり大学解体を叫んで教室を封鎖し、私たちに自己批判を迫ったことで長い教員生活のなかでも特別の印象を持つ人達である。古いものを否定して新しいものを求め、明日は今日より良いと信じ続けてきた、戦後を象徴する人達である。若者文化を謳歌するヤングであり、マイホームからマイカーに乗って、ニューミュージックを口ずさみながらニュータウンの駅前で買い物をするニューファミリーであり、夕焼け小焼けで日が暮れてくではなく、常に前を向いて太陽にはえくしていなければ納得しない世代なのだ。

もの心ついた頃から「戦後」だけを経験した「団塊の世代」はまた、凄じい経済成長と技術革新を経験し、「明日は今日よりも豊かだ」と信じてきました。このため、成長や進歩に対応した小さな変化（仕方の改良）には器用です。しかし、この成長と進歩が約束された仕組みを変えるような大きな変化に慎重にならざ

るを得ないようです。いわば、今日より豊かな明日に乗り遅れまいとする真面目さや勤勉さと、うまくやって来られた状態をこれからも続けたいという固い発想が強いようです。(一九九八年『国民生活白書』)

この白書はこの世代に、「明日が今日の延長とは限らない」(堺屋太一経済企画庁長官)こと、ポスト戦後の大変革の時代が訪れたことを訴えているのである。一九五六年版経済白書の名文句「もはや戦後ではない」の二度目の出番である。そしてこのことはまた人の一生の段階の自覚や、老いを排除してきた「進歩」や「近代」の超克が今の課題であることを同時に意味していたのである。

市民オンブズマンという硬い／軟らかいグループの員として一年の活動を締めくくる忘年会に参加し、そのあと二次会のカラオケについて行った。五十四歳の弁護士が音頭を取って、「裕次郎」の特集で行こうとなった。戦中生まれの「中年」男性もやはり若者志向だ。しかしこれは「ウルトラマン」のように、親から子へ世代から世代へとサイクルとなつて蘇っている今の歌ではなく、この世代のナツメロで、もう前を向いているとはいえない。三十年前

二十歳代で歌ったのとは訳が違うのだ。「中年」男性にナツメロ以外に感情移入できる歌がない。まして戦前生まれの私のような者ならなおさらである。私が教員になつた三十年前には、芸妓の三味線を合の手に唄う端唄や小唄、都々逸など様になる酒宴の歌があつたのだが、今はそれも消え去つてない。へ書き送るへや江差追分のような中高年の歌がなく、歌の中にシニアの感情が詠い込まれていない。戦後の近代化、アメリカ化の過程で大衆文化が若者文化に傾斜し中高年の文化がなおざりにされた結果、歌の中から中年像、老人像が欠け落ちたのである。

三 アニメ／ホームドラマの中の老人像

子供向けアニメを振り返っても爺婆の影はない。そのことが子供アニメの奥行きをせばめている。『鉄人28号』、『鉄腕アトム』、『ジャングル大帝』、『ウルトラマン』、『アタックNo.1』、『タイガーマスク』、『オバQ』、『パーマン』、『マジンガーZ』、『仮面ライダーV3』、『ボルトレス5』、『新世紀エヴァンゲリオン』。ストーリーの中に組み込まれた老人の姿はない。『エヴァンゲリオン』の人氣

は、時代の中で閉塞した十四歳の少年の孤独という今日の課題を的確に捉えているからだ、当然そこに老人の姿はない。老人がおれば物語の設定自体変わっていただろう。

老人がストーリーの中で重要な役割を担うアニメとしては、八〇年代に入って現れた宮崎駿の『風の谷のナウシカ』、『ラピュタ』がある。宮崎駿の作品の特徴の一つには空を飛ぶ場面が繰り返して現われることと、もう一つは老人が物語の中核に登場することである。同じ監督の最近の話題作『もののけ姫』の主人公の少年アシタカは、大和政權に滅ぼされ古代に姿を消したエミシ（蝦夷）の末裔であり、タタリ神と化した猪をやむを得ず倒したとき右腕に死の呪いを受ける。この死の呪いを絶つ手立てを教えるのが老巫女ヒイサマである。

鉄の製錬場タタラ（踏鞴）場には牛飼いや、体に布を巻いた病人（ハンセン病に罹った被差別民）の世話をし、タタラ踏みの人たちから慕われる女性エボシがいる（『タタラ場や鍛冶、鉱山など山民を守る山の神は一般に女性神です。』『歴史の中で語られなかったこと』網野善彦／宮田登 洋泉社 一九九八年）。タタラ場は都市のアジールとして描かれている。タタラ場と対立する太古の森は現代人にとって癒しの空間

だが、山犬や狼々、猪など野性にとつてのアジールであつて、不老不死のシシ神が住むところである。おんな、子供、老人、非人、アジール、物の怪と神などなど戦後近代を越える作家の想像力の遠近法が、このアニメに奥行きを与え、記録的な観客数に結びついたのである。

アメリカ映画には、娯楽ものでも日本のホームドラマなほど違つて社会性がある。たとえば『コクーン（蘭）』。この映画の中では老人たちが二十五歳に若返ろうとする。老いと死に逆らつて、永遠の若さを保つ宇宙生物が入ったコクーン（蘭）が沈んでいるプールに飛び込むという、アメリカでも一般的な若さ神話を扱った皮肉ともとれる物語だ。アメリカ娯楽映画の面白さの秘訣のひとつは、宇宙生物も異民族も子供も老人も障害者などのマイノリティも入り交じつて登場する幅の広さと奥の深さにある。戦後すぐに観たアメリカ映画に『ブルックリン横丁』というのがあるが、これも少年や老人を含め横丁に住むいろいろな人達が織りなす人間模様の物語である。アメリカ映画は多元的であることによつて面白いが、それはもともとアメリカが多文化社会だからである。

アメリカの五十歳以上の高齢者たちを会員とするNPO

であるAARP（はじめは全米退職者協会の略称であったが、後に正式名称となった）は、一九五八年に設立され今では会員総数三三〇〇万人、本部は首都ワシントンDCに置き、FBI（連邦捜査局）の並びにある十階建ての立派なビルを持つ。職員は約千人、テレビ・ラジオのスタジオを備え、高齢者への理解を求める番組を全国の局に無料提供している。全米に支部を置き、税金の申告や住宅購入時のチェックなどのボランティア活動に参加している人の数は十六万人に及ぶという（『読売新聞』一九九二年二月六日）。「奉仕を受けるためではなく、奉仕するため」の活動をモットーとして運営され、政治的にも経済的にも文化的にも大きな影響力を持っている。

この協会の隔月刊誌『モダン・マチュリテイ』はマンモス雑誌といわれる『少年ジャンプ』など足下にも及ばない三〇〇万部という驚くべき発行部数を誇るシニア雑誌であるが、政治と教育、女性やマイノリティ・障害者の生活上、定年後の人生設計、高齢者の働く権利、高齢者の役割の開拓などをその使命とし、若い世代におもねらず、徹底したシニアの立場で編集されている（AARPホームページ）。

戦後すぐ輸入され上映された『ブルックリン横丁』や『ママの思い出』、『ゴーイング・マイウェイ』などのアメリカ映画は日本人と日本の映画界に大きな影響を与えた。しかし映画からテレビに引き継がれ一九六〇年代後半から七〇年代に家庭で人気のあった日本のホームドラマは、アメリカ映画のもつ社会性を切り捨て、家庭を聖域とし家族の日常茶飯事に焦点を絞る内向きのものだった。それは当時一般的となったサラリーマン家族の愛情物語であって、高度成長期のいわゆるマイホーム主義を反映していた。いまは家族の冬の時代であるが、当時は家族こそが価値の中心とされた。

「GHQ」という語彙は占領軍総司令部から転用されて、会社から家族へ一直線に帰るサラリーマンの合言葉「ゴートホーム・クイックリー」を意味したし、「マイホーム」と「モレツ社員」が一九六五年当時の先端的な流行語だった。『夫を成功させる法』、『台所太平記』、『肝つ玉母さん』、高視聴率でおばけ番組とまでいわれた『ありがとう』などの人気番組が登場して茶の間を支配したのはそのころである。

日本のホームドラマの特徴は、家族のイメージが固定し

ていて幅が狭いことである。エイリアンも外国人も障害者も登場しないし、また出来ない。同じ生活意識、同じ生活水準、同じ生活様式、同じライフコース。つまり一言でいえば単一族意識であり、「人並み」、「みな同じ」、「一億総中流」で、作品としては幅もなければ奥もないおよそ退屈な代物である。『ただいま11人』とか『七人の孫』という大家族のほのぼの物語はあっても、金持ちもおれば貧乏人もおり、田舎から一人でやって来た若者（日本の貸本屋ブームやマンガの戦後史は、集団列車でやって来た金の卵つまり農村出身の中卒少年を抜きに語れないのだが）もおれば取り残された老人もいるという、当時のどこにでも転がっている現実がない。

しかし高度成長が終ると共に、このようなうさん臭い家族像に疑問が投げかけられるようになる。マイホームから排除された子供の反逆を扱ったジョージ秋山のマンガ『アシユラ』が衝撃を与え、『積木くずし』のような家族の崩壊ドラマも放映された。その後九八年放映のNHKの朝の連続テレビ小説ドラマ『天うらら』や九九年現在放映中の橋田壽賀子ドラマ『渡る世間は鬼ばかり』に至る、「みんな一緒」ではない一人一人の人間の差異に焦点を合わせた

物語に関心が集まるようになった。NHKの朝ドラ『天うらら』は自立した人間の集まりとしての家族を描き出したが、その中で池内淳子の演ずる老人ハツ子が、朝番組にふさわしい新しい老人像を描き出しているように思えた。骨粗鬆症で車椅子の生活だが口は達者で頭も元氣、自立してコーヒー屋を営み、倒れた後は自分の責任で家族を離れて老人ホームに行く。赤瀬川原平の負の『老人力』（一九九八年 筑摩書房）も面白いが、『老いは迎え討て』（田中澄江 青春出版社 一九九六年）というような老人論もあり、人生いろいろ、人さまざまである。老人をテレビ視聴者の中心である中年や若者の眼で見えて描くのも大事だが、同年配の目線で捉えることは、いじめのはやるこの現代社会では特に大切だ。

しかしこの朝ドラマで、この老人がなぜ女なのか、男の老人はどう描かれるのか。黒澤明は『まあだだよ』で男の老人の一つの姿を描いており、『渡る世間は鬼ばかり』では、料理店を営む藤岡琢也がもう一つの男性老人を演じて今後の可能性を示しているが、産業廃棄物とか濡れ落ち葉とか散々叩かれてきて分の悪い男の老人のさまたげな生き方を、ドラマの中にも広告の中にもしっかりと見据えて

描き分ける必要がある。老人論はジェンダー論として語られる必要がある。

NHKの連続ドラマ『天うらら』の中で自立した老人を演じた池内淳子（一九三三年生まれ）は、ドラマの老人ハッコ同様ころんで骨折して車椅子生活を余儀なくされた八十八歳の母親の介護をする身でもある。その池内淳子が「五十代からの二十年プラン応援雑誌」と副題のついたシニア雑誌『いきいき』（九八年十月号）のインタビュアーに答えて次のように述べている。

母が転んで骨折して、車椅子の生活になってから、もう五年になります。今、母は歩けないというだけで、いろいろな指示は実にはつきりと出します。お寺さんのことやご先祖さまのことなんかは、やっぱり母でないとわかりません。うちの母は、「車椅子の生活だからなんの役にも立たない」と言いますけれど、冗談じゃございません。人生の先達です。いろいろなことを相談にいきますと、張り切って話してくれます。

母はこの三月で八十八歳になりました。ずっと一緒に暮らしてきましたし、車椅子の生活になってからも

一緒に暮らすのは当然のことでした。そうでなければ、バチが当たります。今の自分がなぜここにいられるのかというと、育ててくれたからです。それを忘れちゃっている人がいるんです。ご飯を食べさせてくれて、着るものを着せてくれて、学校に行かせてくれて、そういう消すことのできないプロセスがズーッとある。仏様はちゃんと見ていらっしゃいます。

四 女性雑誌の中の老人像

池内淳子が語るのは高齢者が高齢者を看る場合の、新聞やテレビで紹介される高齢者問題とは一味違うもう一つの物語だ。このインタビュアーを載せたシニア雑誌『いきいき』は一九九七年に月刊で東京都地域福祉財団東京いきいきらいふ推進センターから刊行されたばかりの新しい雑誌だ。これを追うように『毎日が発見』（ファンケル出版）が一九九八年十月から創刊されている。いずれも直接申し込みで店頭にはない。これらのシニア雑誌は書店に置かれていないだけでなく、その内容も未だハウツーものの水準を出ない。アメリカで三〇〇万部のシニア雑誌と較べよう

日米雑誌における登場モデルパターンの頻度 (件数)

分類項目	誌名	該当広告件数	単身女性 %	単身男性 %	家族内パターン												家族外パターン					発行部数(万)				
					夫婦 — 子	母 — 息	母 — 娘	父 — 娘	祖父 — 娘	祖母 — 娘	祖母 — 孫	子 — 一人	子 — 複数	父 — 兄	母 — 兄	幼児 — 人	小計	カ ン フ ッ ル	男 同 士	女 同 士	男女 混合		子供 複数	専門 — 顧客	会議	小計
日経 Woman	92/2	40	30	75.0	1	2.5											0	0	3	2	2	1	1	9	22.5	24
	MORE	92/2	71	53	74.7	1	1.4	1							1		2	2.8	3	6	6			15	21.1	85
	ソフイア	92/2	11	10	90.9	0	0	1									1	9.1						0	0	22
	シヨッペン	92/2	20	12	60.0	3	15.0							2			2	10.0		1	1		1	3	15.0	45
	レタスクラブ	92/2/10	40	21	52.5	1	2.5	2	2				1	3	1		9	22.5	2	6	1			9	22.5	80
本	オレンジページ	92/2/17	44	29	65.9	0	0	3	1	1			1	1		1	8	18.2	3	3			1	7	15.9	120
	すてきな奥さん	92/2	25	15	60.0	0	0	1									1	4.0		5	1	1	2	9	36.0	65
	New Woman	91/12	28	23	82.1	3	10.7	2									2	7.2						0	0	134
	Working Woman	91/5	20	15	75.0	0	0			1			1				2	10.0	1	2				3	15.0	85
	Working Mother	92/1	25	7	28.0	0	0	2	6	1	1		3	3			17	68.0				1		1	4.0	69
米	Family Circle	92/1	26	11	42.3	0	0	1	2		1		5	1			11	42.3		2		2		4	15.4	515
	Woman's Day	92/1/7	24	12	50.0	1	4.2	2			2		1	2			8	33.3			2	1		3	12.5	475
	McCall's	92/1	22	6	27.2	0	0	3			1	1	1	4	1		1	12	54.6	2			2		4	18.2

注：日本のものはすべて92年2月号を使ったが、米国の場合92年1月号としたが入手の都合で一部不揃いとなった。
 米国雑誌の発行部数はABC 91年度公表部数に基づく。日本の雑誌は公称部数。
 出所：拙著「広告の国際比較」『広告新時代への提言』日経広告研究所 1992年。

もない。まさに荒涼たる姥捨ての光景である。日本の社会が子供社会でインマチュアだということを意味しているのだが、高齢化社会を控えてメディア（暮らし）と高齢者の関係があらためて問い直されなくてはなるまい。

以前、私は日米の代表的な女性雑誌を取り上げて、広告に登場するモデルの比較を行った。その結果アメリカのモデルに家族パターンが多いのに日本の場合にはナルシスト的なシングル・モデルが多いこと、日本では消えてしまった祖父母と孫の組み合わせが米国の主婦雑誌の広告のモデル理想像として登場することが読み取れた。九二年当時アメリカではキャリアウーマンの家庭回帰現象がひとつの潮流となっていて、「ウーマンリブ」は死語となり、フェミニズムもダートイといわれ始め、女性解放運動の先頭に立ってきた『Ms』や『SAVY Woman』も休刊し、代わって部数を伸ばした『Working Mother』の表紙は毎号子供を抱き締める母親で飾られ、その内容も子育ての楽しみや「いろんな家族が集まって一緒に生きよう」といったテーマを含むようになっていた。

アメリカではいったん否定された母親業への回帰が潮流となっている頃、日本では母性神話、家族神話が解体して

新たに職業神話が女性たちを捉えるようになり、それに伴って雑誌広告の中でも単身者志向が強まったのである。アメリカの有職者雑誌『Working Mother』の該当広告二十五件のうち単身女性モデルは七件（二八・〇％）に過ぎないのに対して、日本の『すてきな奥さん』のような専業主婦向け雑誌でさえ単身女性モデルは二十五件中十五件（六〇・〇％）と、女一人消費のユートピアを翔ぶのである。『ソフィア』の場合には「女一人」が実に九〇％に及んでいる。

五 フェミニズムと高齢者観

日本でもアメリカに十年遅れて、このような「男を排斥して女だけのユートピアを作る」ことを夢見るフェミニズムの排他的思考法や、「女性差別もろとも男女の区別も撤廃する」急進フェミニズムの画一思考に対する揺り返しが最近起こりつつある。

私が日々接している学生たちの日常の話題の中にも「フェミばなれ」の動きが見られるし、同じ世代の動きでは一九九八年十二月大阪大学のキャンパスで、学生たちによる

シンポジウム「『ダンジョサベツ』なんてカンケイない？ ジェンダーの言葉はどうしたら社会に伝わるか」が開かれたりしている（『朝日新聞』一九九九年二月六日の学芸欄）。マスメディアの上でも、橋田壽賀子ドラマ『渡る世間は鬼ばかり』の藤岡琢也や野村昭子らが演ずる爺婆が、離婚、離婚と騒ぎ立てる団塊世代の娘たちをたしなめる言説、さらには「日本の社会から父性も母性も消え失せることになったら、銀行や証券会社が一つや二つ姿を消すよりも、はるかに危険」といった妻たちの異論（『朝日新聞』一九九九年二月三日の論壇）、フェミニズムの過激な大衆化が、男女対等の建前論を日常の機微にまで持ち込んだために、『あなたはまだもう幻想の女しか抱けない』（速水由紀子 筑摩書房 一九九八年）というしらけた現実にも幻滅した妻子持ちの男が、週に一度独り暮らしの母のもとへ密かに通い、そこに幻想の女ではない本物の女を知るといふポストフェミニズム小説、篠田節子の「密会」（篠田節子、小池真理子ほか『恋する男たち』朝日新聞社 一九九九年）などが新しい流れとなり始めた。ここでは実家と老母は中年男のアジールとなっている。NHKスペシャル『学校が好きですか 中学生日記三十七年の映像』（一九九九年三月二十二日放映）の中

で、学校でも家庭でも強制される義務教育から逃亡する女子中学生が、僅かに祖父母の家に救済の場を求めた記録があった。「男と女」の別の軸は「子供と老人」であろう。戦後語られてこなかった「子供と老人」をあらためて語る必要がある。

最近では広告の中にも同じような「フェミはなれ」の考えが意見広告のような形で登場するようになっていた。例えば一九九九年一月十四日の『朝日新聞』の全面広告で次のような意見を述べている。

世の中から女らしさが
切り捨てられていく。

人の幸福に大切なもののな。

翻訳家・エッセイスト 伊藤緋紗子さん

家庭の中で、仕事場で、日本女性の女らしさは摩滅していないか。柔らかさ、優しさ、美しさ、そしてロマンチックな気持ちがい失われているか。

「女性が現代を生き抜いていくために、男性と同じ土俵に立ちたいと望み、男性のものとさしでの評価を得よ

うとする。女のおいを消し去り、突き進んで、それで毎日幸福ですか」

人生とは何か先の目的のために、毎日を消化していくのではない。勝負ではもちろんなく、一日ごとに、優しく満ちたたりることを楽しんでいくものと。

これはそっくり『フェミニズムの困難』（吉沢夏子 勁草書房 一九九三年）、『女であることの希望——ラディカル・フェミニズムの向こう側』（吉沢夏子 勁草書房 一九九七年）が理論レベルで述べたことの身近な思想の表現である。

もともとジェンダーへの関心は、民族、階級、子供や老人など産業社会の周縁に配され抑圧された多様・多元な人間の諸関係の一関係として近年意識の表層に浮上してきたもので、何もジェンダーだけが民族や階級、子供や老人などの諸関係から切り離されて特別に扱われるべきものではない。「近年泣いたりぐずったりという母親への訴えかけが極端に少ない」「サイレント・ベビー」が増えているという。その原因は生後、親からの愛情を込めた、様々な肌を通しての刺激が不足しているためだ」（速水由紀子 前掲

書）という説もある。

アメリカに次いで日本で現在表面化している子供の反乱には、もちろんさまざまな要因があるが、「男を排斥して女だけのユートピアを作」り、「日本の社会から父性も母性も消」し去ろうとすると告発される「急進」フェミニストたちの言動と決して無関係ではなからう。米国の大学院で指導教授からセクシュアル・ハラスメントを受け、一人芝居「私は生き残った」をつくり演じているという高橋りすさんによると、帰国後つらかった経験を反性暴力運動に役立たせてほしいと訴えたら受け入れてもらえず、運動家の中から「被害者が泣き寝入りするから次の被害者がでるのだ」といった声まで聞こえてきたという。それは「被害者への敬意と共感の欠如」からくるものだと言っている（『朝日新聞』一九九九年二月十九日の論壇）。女性が男性と同じ土俵に立って、男性の欠点をさえる目的一途に勝負し、「女性的な」優しさと温かさをもって弱者をいたわり共感する態度を欠いては、フェミニズムの意義も失われよう。

近代資本主義の男性優位の下で排除され無価値化されてきた「女性的なもの」の復権を目指してきたエコロジカル

なフェミニズムが、同じ近代資本主義の利潤追求のための効率主義の下で排除され無価値化されてきた、障害者・マイノリティ・弱者、あるいは「老人や子供のなもの」の復権を同じ視座の下に捉える戦略地点に立つてはじめて、その社会的意義が評価されるのである（高齢化社会は寡婦社会でもある）。そこから多様な価値を内に含むコスモロジカルな眼で人間をイメージする可能性、例えば失意の老音楽家がホームレスの貧しいバレリーナを助けて、自分自身も人生の花道を飾るというチャプリンの『ライムライト』のような、性、年齢、階級などの違いを越えた人間の物語として視野の広がりや展望が、メディアのジェンダー表現にその奥行きを与えることになる。

〈お手玉で祖母と遊んだ思い出が福祉に向けた夢の原点〉

学生百人一首のこうした何気ない歌の情景が消えて、カタログ誌になり果てた女性雑誌の空しさに、読者の気づく日もそう遠くはないだろう。「私は年を取ることをやめて、アートヘアで若返りました」とか「今の素肌が嘘のよう。年々若くなる不思議な人」というような高齢女性向

け広告コピーと、勃起剤バイアグラを命と引き替えに飲む愚かな男性老人をわらう報道記事が同時に社会面を賑わすような、若さ信仰のこの時代の雰囲気になわって、『老人であることの希望』が当たり前のこととして通用する日も遠くないだろう。

人間が永い時をかけて、経験をとおして、その職業の根本にあるものをつくる。そこには当の人間の意識的なものも無意識的なものも、すべて参加している。科学者にはその研究をつうじての人格と切りはなしたいそれがあり、職人にもその仕事をつうじてのそれがある。マリタン（ジャック・マリタン＝フランスの哲学者 筆者注）は、それが人間が生きる上での習慣だといっているのです。

僕は光（大江 光＝作曲家）にとつて作曲することこそ、その生きる上での習慣をなしていると思います。知能に障害がある——知的にいつまでも子供のままの——息子について、誇張した言い方と聞こえるかも知れませんが、僕にはかれの作曲の仕事ぶりとその作品に、光の人格があらわれていると感じるのです。

(大江健三郎「わが光の音楽」『大江 光の音楽』
日本コロムビア株式会社 一九九二年)

私はここ何年もの間、毎朝大江光の音楽を聞きながら新聞に目を通し、朝食をとり、仕事に取りかかるのを日課としている。私も信仰を持たない人間であるが、そのなかに彼の父親と同様「Grace (恩寵、品の良さ、感謝の祈り)」としての音楽」を聞くからであり、「暗い泣き叫ぶ魂をもった人間にまで辿りつく」声を聞くからでもある。知能に障害がある作曲家の無垢の魂が、苦海に浄土を求める高齢者の鎮魂の調べとなって、私に『老人であることの希望』を与えてくれるからである。